

合田氏の書評「資本主義と闘った男」に寄せて

金融・労働研究ネットワーク 小林寿太郎

合田寛氏の書評「資本主義と闘った男」を興味深く読ませていただきました。(当サイト参照 [書評「資本主義と闘った男」](#))

氏の書評の本題とはずれませんが、感想をのべさせていただきます。

「資本主義と闘った男」の宇沢弘文氏について、河合栄次郎門下の木村健康の影響を受けたと紹介されています。自由主義者であった河合栄次郎は軍部にこき入れられ、東大を蹴首され、木村も東大を去っています。宇沢氏は木村からジョン・スチュアート・ミルの「自由論」を学び、リベラリズムの思想に触れたことが紹介されています。河合栄次郎が東大経済学部を極右・軍部によって追放された事件には複雑な背景があったようです。

この事件の少し前、東大経済学部では共産主義を批判する近代経済学派の河合とマルクス経済学派の大内兵衛などが激しく対立していました。結局、国家権力を背景とする河合らが大内らを追放することに成功しました。ところが、その後、河合を西欧かぶれと批判する皇国経済学(いかなる意味でも社会科学とは言えない)をかかげる土方成美、本位田祥男らが台頭しました。

近代経済学派に対する土方、本位田らの攻勢は学外の勢力も巻き込み、東大をゆるがす深刻な紛争となりました。結局、海軍高官にして東大学長である平賀譲が、大内と土方の両名を処分する形で決着します(平賀肅学)。平賀は造船工学の専門家で常識的な軍人だったらしいですが、こういう経過があるので河合を100%肯定するのは無理だと思います。

ところが本位田は戦後、協同組合論の権威として復活して労金・農協などについても論文を書いており、しぶとい人物ですが、こういうしぶとさを見習う必要があると思います。

合田さんはオペレーションリサーチについて否定的ですが、米軍が第2次世界大戦で採用した軍事的にもっとも効率的な結果を生む手段を選択する理論で、かつて日本軍(そして現代日本企業も)がついに習得できなかったものです。例えば神風特別攻撃隊を効率的に撃破するための戦闘手段の組み合わせを計算するものです。

現代のゲーム理論とも関連しますが、ゲーム理論を用いて社会的差別を解明する研究があります。東大経済学部の松井さんのグループの研究によって、偏見が差別をうむのではなく差別が偏見を生むことが論証されたそうです。「棲み分け」「タイプの分離」が起こるようなゲーム準備して、ゲームのプレイヤーが結果を経験によって正当化する場合、偏見が生じることが判明しました。「多数派」は「少数派」と同じカテゴリーにいる場合、自分達の利得が低下する原因が、自分たちの非友好的態度にあるのに、それをあたかも「少数派」がもたらす直接的害悪であるかのように「空想」する。その「空想」が経験から否定されないことから、それを信じ切ってしまうといいます。このことは人が経験から推論するなかで、過誤が生じること、その過誤は深刻な社会問題を引き起こすことを示しているそうです。

ゲーム理論の動向も重要と思います。